平成２９年度第３回館林市子ども・子育て会議　会議録概要

１　日　　時　　平成３０年２月２１日（水）午後３時００分～４時３０分

２　場　　所　　市役所５階研修室

３　出 席 者

【館林市子ども・子育て会議委員】　１５名

森委員、永井委員、大谷委員、角田委員、田村委員、倉上委員、荻野委員、鎌田委員、荒川委員、飯塚委員、阪田委員、稲田委員、小澤委員、平林委員、田端委員

（以上名簿順）

【事務局】　１０名

保健福祉部　：中里部長

こども福祉課：石崎課長、妻神子育て支援係長、萩本保育係長、恩田主任、砂賀

健康推進課：武政母子保健係長

教育総務課：青木課長、武井総括係長

学校教育課：川島課長、山口学事係長

【傍聴者】　なし

４　議　　事

（１）館林市子ども・子育て支援事業計画中間見直しについて

（２）平成 30 年度教育・保育施設の利用定員の設定について

（３）その他

・子どもの生活実態調査について

・来年度の予定について

５　配布資料

・会議次第

・館林市子ども・子育て会議委員名簿

・館林市子ども・子育て会議について

・資料１　館林市子ども・子育て支援事業計画中間見直し

・資料２　平成 30 年度教育・保育施設の利用定員について

６　会議内容（概要）

（１）開　　会

（２）あいさつ

・中里部長

（３）議　　事

①館林市子ども・子育て会議について

・事務局より説明

【質疑応答等】

会　　長：事務局から改めて子ども・子育て会議とはどういうものなのかという話があった。自分たちがこの場で発言し、この場で気づいたこと、特にみなさんが日頃、自分のアンテナに引っ掛かった子供の姿や、この時こうあってくれたら子どもにとっていい環境が整えられるのではないかと思ったこと等が、残念ながら行政に関わる方たちは、日頃まち中を歩き回っているわけではないので目にすることが少ない。私たちは市民の代表として、またそれぞれの団体の代表者として「これは伝えておきたい」ということが、予算につながり、その予算が最終的な行政のやることの内容に落とし込まれ、それが子どもたちの環境をつくっていく。一人一人の子どもが何かがあった時に立ち上がれて人と協力し合いながら前を向いて歩いていけるように、行政側に伝わるように意見を言わなくてはいけない、自分たちの意見をしっかりと前に出すということが第３回目の視点かと思う。

まず、委員が始まる前にお話をしていた人口の未来の年表について、勉強させていただきたく、説明をお願いしたい。

委　　員：(未来の年表について資料を説明、人口減少、一人暮らしの増加と理由等の話から結婚についての生命保険会社の調査結果を説明)

結婚相談員を 10 年やっているが、現在女性登録者は７名に減っている。男性登録者は 38 名。私が入った頃、女性は 26～27 名いた。男性は 70～80 名いた。現在登録者は 45 名まで減っている。29 年度は 2 組成婚。先月の 4 日にバレンタインパーティーを行った。男女 12 名ずつで 24 名。ジョイハウスで行ったが、12 組のうち 7 組が第 1 次のお見合いでペアになった。ただ、これから先どう発展してくれるかどうかわからないが、それに期待するほかない。

現在、結婚相談員 13 名で、10 年前くらいは 3 時間のうちに相談者が 14～15 名くらい来て大変だったが、今は非常に少なくなってしまい、特に女性が少なくなっている。以前は人の面倒を見てくれるおじいちゃんおばあちゃんがいて、写真を持って行ってどうですかというのがあったが、今はそれが言えない時代になっている。適齢期の方がいたら、社会福祉協議会に登録し、新しい人生を探すというような形で応援していただければと思うし、勧める方も気をつけていただいてご協力をお願いしたい。

会　　長：委員のお話で、人口減少が子どもの問題ではなく、大人の問題だということ、

大人の生き方がそのままそっくり出るということなので、大人がどういう考え方をしていくかというところまで視野を広げることも重要なのかと思う。そのことを基に考えながら、議題について事務局から説明をお願いしたい。

②館林市子ども・子育て支援事業計画中間見直しについて

・事務局より説明　資料１

【質疑応答等】

会　　長：放課後児童健全育成事業の方は低い年齢のほうが減っていて、小学校４年生以上のほうが増えていてというふうに変更があった。そのほか教育・保育は、推計人口から考えて増やしてあるとの考え方でよろしいか。そして30年度、31年度のそれぞれの場がうまくいくかということについて、審議をしていきたい。幼稚園、保育園、放課後児童クラブの立場から、数字から受ける想い等現状を含めて、ご意見をお願いしたい。

委　　員：園のお母さん達は働いている方が増えている。2号認定が半分以上で、仕事をしている方が多いので18時まで預かり保育をしている。

委　　員：公立幼稚園は全員１号認定だが、申込人数が毎年減っているのが現状。お仕事をされているお母さんは保育園希望となるが、公立幼稚園でも預かり保育を16時までやっている。今後預かり保育のＰＲを充実させるということで定員数を増やしていきたい。保育園の２号認定を受けている方でも、パートなどで幼稚園の１号認定を受けられる方がいるかと思うが、なかなかうまくいかず、だんだん減ってきている。預かり保育の利用については、お仕事の関係、病院に行くとか、下の子の都合とか、お母さんのリフレッシュもあり、理由は問わず受けさせてもらっている。

委　　員：数字はともかく、福祉施設なので困った人がいれば助ける、入りたい人がいれば入れてあげるということで、確保方策という形で数字の計画も重要だが、常に需要があれば応えるという姿勢で今もいてくれているので、このまま館林の子どもに関わる行政の方たちがそういう姿勢でいてくれればよろしいのではないか。予算等行政の都合もあり、すぐというわけにはいかないと思うが、いつでも動くというスタンスでいてくれているのでこのまま続けてくれればいいかと思う。

委　　員：公立保育園は９園あり、そのうち４園が19時までの延長保育を行っている。正規で働いている方は目一杯仕事をしているので、延長保育をやっている園を希望されるお母さんが多い。まちなかにある南保育園は、以前は、標準時間保育の子どもは少なく、おじいちゃんおばあちゃんがお迎えに来ることが多かった。今は2/3くらいは16時以降の標準時間保育であり、お母さんたちが頑張って働いているというのが現状。平成30年度の保育園の入園状態も、

多くのお母さんたちが働いているという状況から定員オーバーしているところもある。

委　　員：会長のご指摘のとおり、平成27年度は低学年の方が多くて高学年が少ないが、平成27年度から国が方針を変えて、学童クラブの預かりの対象を低学年中心から全学年型にしなさいという指導をしたために、高学年の方にシフトする傾向にある。見込み量の出し方だが、対象の人数全体は減っているが、預けたいという希望はむしろ増え続ける傾向にあるのではないかと思う。見込み量の出し方のところを、人口推計そのままでいったのか、減少度を考慮して調整したものか確認がしたい。

会　　長：もう一人話を聞きたい。障がいを持っている子ども達の学校が終わった後、お世話になっている放課後等デイサービスのことについて、話を伺いたい。

委　　員：館林市内で6か所か7か所程度事業所があり、館林のお子さんだけで何人利用しているという把握はできていない。どういったお子さんが利用しているかというと、小中学校の中にある特別支援学級、それから県立特別支援学校や県立高等特別支援学校に通っているお子さんを受け入れる。そういった障がい児を受け入れている事業所は市内でも増えてきている。特に、セサミさんという事業所が大変長くやっていて、小さいお子さんの事業所と、小中学生・高校生の事業所ということで2事業所やっている。

会　　長：それでは、今回の中間見直しについて、この数値で良いのか諮らなければならない。ただ、それに言葉をつけるとした場合、委員がお話をしていていただいたように、柔軟な対応を市役所の方でしてくれるようであれば、この中間見直し案で良いと思うということであるが、でも予算が無い、これ以上どうにもならないと言われると、私たちは「ちょっと違うのでは？」となるので、人口比率等々でこの数が設定されたのか、またその柔軟な対応も補正等でできるのか､その辺を説明していただければみなさんが納得されると思う。

事 務 局：それでは、見込み量の出し方のところで、説明させていただく。今回変更させていただいた見込み量については、推計児童数と現状の女性進出、両親の働く率が上がってきているという推計までは残念ながら見ていない状況。何とかけているかというと、当初、平成27年度に事業計画策定をさせていただいているが、その前の平成26年にニーズ調査をしており、各年代の世帯に調査をかけ、放課後児童健全育成事業については、国で示したものになるが、ひとり親世帯、両親がフルタイムで働いている世帯、両親がフルタイムとパートタイムで働いている世帯、両方ともパートタイムで働いている世帯を対象にして、アンケートをとっている。どういう内容かというと、低学年・高学年含め学校が終わった後にどういうところに子どもを預けたいかというアンケートに対して、放課後児童クラブを利用したいというところにチェック

を入れた数をもとに出している。5歳児を対象にこちらのアンケートをかけ、その時の比率は今回変えずにやっているので、委員から話があったとおり、時代の中で共働きの世帯が以前よりも増えているというのがあるため、今回提示させていただいた見込み量よりももしかしたら、多いことが予想されるが、柔軟に学童の支援数の範囲内で整備を図ったり、各児童クラブの方のご協力をいただきながら、MAXの人数までいかないような人数で運営を図れるように努力をしていきたいと思っている。

会　　長：今までと同様に、随時必要に応じた計画の見直し等、柔軟な対応をしていただけるということでお願いをしたい。では中間見直しについて、決定についてご承認いただきたい。

③平成30年度教育・保育施設の利用定員の設定について

・事務局より説明　資料２

【質疑応答等】

会　　長：常楽幼稚園についても、新制度へ移行される。必要があれば柔軟な対応をしていただけるとのことで、ご承認いただきたい。

④その他

子どもの生活実態調査について

・事務局より説明

【質疑応答等】

委　　員：支え合いということで、利用している子どもやお母さんだけでなく、団塊の世代の方たちの力を借りて、学校の空き教室などを利用できるといいなという話は以前から出していて、そういう部分が進み実現できることを期待している。

委　　員：取り組むべき方向性のところで、子どもの学習面における支援の充実で想定される対策事業が、子どもの学習支援事業の中学生への拡充、放課後等の補充的な学習サポートの充実ということだが、もちろん必要なことでやっていかなくてはいけないと思うが、私自身、仕事は塾で数学を教えていて、正直できなくなった子をできるようにするのはかなり大変なことで、できれば幼児期からできる子になって、そのままいってくれるのが一番良いと思う。幼児期に勉強を教えるということではなく、公立幼稚園でもやっているように、勉強としてではなく、親子遊びの中で数を数えられたことを褒めてあげると、例えば算数が好きになったりすると思う。そういう重要性を保護者の方に言うチャンスを市のほうでつくってもらえたら良い。そういうことを、例えば幼稚園で話していただければ、幼稚園に入る子が増えてくると感じた。

委　　員：児童の学習面における支援の充実というところで、保護者の考えで、小学校くらいまでは自分で子どもの勉強をみられると思うが、中学校になると難しくなってくるので自分でみられる自信がなくなってくると思う。将来の楽しみがなくなってきているところに、勉強ができないからということがあるのだとしたら、学校の補習等で協力していただいて、ベースの底上げに力を入れていただけたらいいかと思う。先生の人柄で勉強が好きになるというのもあると思うが。

委　　員：小学校２年生の子どもがいるが、勉強につまずいてきてしまって、小さい時からの絵本の読み聞かせが今になって少なかったかなと思う。もっと毎日毎日やってあげれば、今もっと勉強が好きになってくれたのかなと思う。親子のコミュニケーションがすごく大事だなと改めて思う。

委　　員：今朝のニュースで、中学生の部活時間を１時間にして、その他の時間を地域で、部活動ではない活動をしようという動きがスポーツ庁より出ているというニュースがやっていた。私もスポーツが大好きなので、ぜひ、地域で子どもたちを育てるというところでは協力していきたいと思った。

委　　員：私は外から来た人間なので館林を中から見るということが若干みなさんとずれていると話を聞いて思ったが、二つお話したいことがある。

一つ目は、人口が減少していくということは、日本全体として起こってくることだと思うから、小さいπの中でみんなが取り合うようになってくるということになる。館林の中だけで考えるということは不可能になってくる。例えば、女性が二人しかいないと考えた場合、他のところから来てもらうということを市の方でやっていただくことが大事だと思う。

私は子どもが小学校１年生で太田に通わせていて、太田のことを色々聞き、私も実際よく足を運んでいるが、これは上手いなということがよく目につく。比べてどっちが良いということではないと思うが、今回、人数等出していただいているが、柔軟に対応していただけるかと言った時に、そこが濁されるということは、少し不安に思った。例えば館林の中に今いるお母さんだけでなく、もっと都会から人を引っ張ってこようと思って施策を考え、それも含め子どもたちのために柔軟な対応をしていただきたいと思う。

もう一つは、大学生との連携というのもあってもいいのではないかと思う。私は大学院に５年おり、２つの大学院に行ったが、どちらも中学校とのプロジェクトをやって学生にとっても良い刺激になった。大人が子どもに寄り添うよりも、どうしても大人は親になってしまい視点が違う。高校生だと若すぎる。大学生だったらもう少し勉強を教えられて、その子どもに寄り添える。あとは研究費として大学の方にお金があれば、大学の先生としても研究が進むということになるし、実体験として子どもとふれあうということが大学生

ならできると思った。

委　　員：そこで意見がある。埼玉大学の先生が大学生をつかっての取り組みで、学校に行けていない子たちが通ってくる所なんですが、子ども達の居場所づくりのためのイベント等をやって、７０人の就職者が出たという実績があるそうである。会長に頼めないものかなと感じた。

委　　員：私はＴ☆バンブーという活動をさせていただいている。私も館林の人間ではなく、外から入ってきた人間なので、館林を子どもも誇りに思えるようにということで、館林の色々な方とコラボレーションをしている。ママにも女性として人材としても色々なサークルを立ち上げている方がいるが、それを妊娠している方や結婚する前の若い方に発信する場所がない。子どもが新生児で生まれてすぐの時に体が固いとか、ずっと抱っこしないとならないとか悩みが出てきて、第一子の場合、それが当たり前と思ってしまう。そうではないということを発信して、ママたちが悩んで産後鬱にならないような仕組みがうまくつくれるといいなと思う。自然育児とか色々なサークルをやってる方もいる。それを上手く伝えられない。必要な情報を知りたい妊婦やママたちへ、情報を発信する場所があるといいなという話をしている。結婚相談の話で、知り合いの方が赤ちゃん先生というのをやっていて、お見合いの所に赤ちゃんを連れて行ってリアルな体験をさせている方もいる。

また、今、教員を休んでいるが、発達障がいの子どもを持つママから相談を受けている。普通のクラスにいるが、発達障がいの診断を受けられないグレーゾーンの子どもたちはとても苦しんでいる。そのような子どもたちに手を差し伸べられるような、知識や情報を発信できる人や発信できる場所があれば良いという話も出ている。

（４）そ の 他

・来年度予定

館林市子ども・子育て支援事業計画　平成 29 年度事業進行管理

ニーズ調査実施

（５）閉　　会